
ESP部のとある日常

式織 檻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ESP部のある日常

【Nコード】

N6503C

【作者名】

式織 檻

【あらすじ】

某県立高校ESP部の、しがない日常の、しがない一幕。

某県の某県立高校。

その南校舎の三階にある一室。『ESP研究会』と橙色のゴシック体で書かれた看板を掲げているその教室に、駆け込んで来る男子高校生がいた。

「こんちわーっ！」

と叫ぶように言って、薙ぎ払うように横開きの扉を開け放つ。そして鞆を放り投げ、あせあせと机に向かった。

その後ろにひょっこり顔を出したのは、こちらも同じく男子生徒。丸眼鏡をかけた、この部室の先客だ。

「やや、こんにちは、坂巻くん。そんなに慌ててどうしたんだい？ 若人が生き急いでも、道を過っただけだよ？ 人生いかなる時も、余裕を持って——」

「部長！ そういう話は後にしてください！」

坂巻と呼ばれたその男子生徒は叫ぶように言い、漁るように棚を引っ掻き回している。数秒ガサゴソやった挙句に取り出したのは、上部に「予算申請書」と書かれたプリント。下の方には生徒会の判が押してある。

「ん？ ああ、予算申請書か。そう言えばそろそろ生徒会の役員会議だったね」

「何悠長な事言ってるんですか！ 締め切り今日なんですよ！」

「時間ならたつぷりあるじゃないか。放課後は始まったばかりだよ」
「僕はこれから予定があるんです！」

部長に目を合わせることもなく、坂巻はプリントを机に広げ、ペンケースからボールペンを取り出した。そして机に広げてあった書類を左手でめくりつつ睨みつつ、必要事項をプリントに写していく。
「つまり何だ、君は、そんな書類を書いたために部室に来たのか？ 何とも連れないじゃないか。部長として、この現状は悲しいこ

と甚だしいよ。ここは『ESP研究会』なんだよ？　むしろ超能力でもって時間遡行し、失われた時間を取り戻そうとする方が、我が部として正しい方法なのではないのか――」

「常識として正しくありません！」

「時間遡行が駄目なら、未来視をすれば良かったんだ。占いで予知夢でも、こうなる事が先に分かっていたれば、対策も立てられ――」

「ああ！　部長！　また僕の机にカップ置いてるじゃないですか！

　　コーヒー入ってるし！　ここには重要な書類が置いてあるから、そういうのは置かないでくださいって、何度も言ってるじゃないですか！　　コーヒーこぼしたらどうするんです！」

「ああ、ああ、わかったよ、そう怒鳴らないでくれ。……やれやれ、君の潔癖症も相変わらずだね。全てを自分の思い通りにしようとするんだから。付き合い辛い事甚だしいよ」

部長は肩を竦めながら、置いてあったカップを手を取った。そしてそれを口に持っていく。

ズズズツ

「あちつ」

部長は驚いてカップを口から離し、右手で唇をさする。

「おゝ……あち。まだ冷めてなかったか……」

しかしそんな部長の行動を気にする事など微塵もなく、坂巻はせっせとペンを動かしている。

部長はその丸まった背中を見下ろしながら、

「しかし考えてみなよ。占いなり予知夢なりで未来が見えたとして、果たしてその結果は変える事ができると思うかい？　何でも量子力学にのつとれば、観測するまで分らない事象というのが存在するらしいが。だが、もし未来が不可変だとしたら、その人にとって人生がつまらない事甚だしくなると思わな――」

「できた！」

坂巻は授与された賞状のようにプリントを両手で握り、すくっと立ち上がった。

と、部長は後ろから坂巻の肩に手を置きながら、

「よし、じゃあ早速これから談義を始めようか。今日の議題は――」

「だから僕、今日予定があるって言ったじゃないですか」

坂巻は首だけで後ろを振り返り、部長に抗議。しかし部長は首を横に振りながら、

「いーやっ。何と言おうが今日こそは参加してもらうぞ。これは部長命令だ。この『ESP研究会』以上に重要な事は君の人生に皆無だと言える事甚だしい。大体君は、先週も出席率が――」

「部長は部活と人の命と、どっちが大切なんですか！」

「ひ、人の命？」

「じゃ、部長、これ提出しておいてください。多分生徒会室の前にポストがあると思うんで」

そう言つて、坂巻は部長にひらりとプリントを渡す。

「ちょ、坂巻くん！ 曲がりなりにも僕は部長で君の先輩だよ？

こういう雑用を――」

「じゃ、お先でーす」

言いながら坂巻は鞆を担ぎ上げ、脱兎の如く部室を出て行った。

後に残された部長は

「まったく」

と嘆息するだけだった。

帰り道。

いつもの道を駆け足で進んで行く坂巻は、まずスーパーに立ち寄った。夕飯の買い物に来ている主婦がごった返しているこのスーパーは、坂巻も買い食いに使う御用達の店である。

店内に入ると、坂巻はまず医療品売り場に向かった。そして棚から小さ目の絆創膏を取り出す。

次に坂巻は飲料コーナーに向かった。冷気が噴き出していてひんやりしている棚に辿り着き、

「えーと、お茶、お茶……」

と呟きながら辺りを見渡すが、目当ての物が見つからない。

「え？　嘘？　売り切れ？」

いや、むしろペットボトルのお茶全般が見当たらない。……………

まさか。

坂巻は振り返り、右左をきよろしながら店内をうろついた。そしてものの数秒で、

「あ、あった、あった！」

特売品コーナーと書かれた棚の上、ペットボトルのお茶が山積みになっているのを発見した。

「ったく、心臓に悪いよなー」

と呟きつつ、坂巻はレジに向かい、二つの品を購入。袋に詰める事もなく、そのまま店を後にした。

その後坂巻が向かったのは、通学路沿いにある踏み切り。

大して人通りも多くない場所だが、それでも一分に一、二台の車と数人の通行人は渡っていく。坂巻はその遮断機の側に佇み、先刻買ったお茶を口に含んでいる。

何かを待っているようにボーツと立ち尽くすこと数分。踏切がカンカン言い始めて、遮断機が降り始めた。

と、そこに駆け込んで来る子供。赤いランドセルを背負った小学生だ。

遮断機が降りきる前に渡ろうとして、慌てて走って来る。頭を下げてどうにか一つ目を潜り抜け、急いで端まで渡りきろうとした瞬間、

その女の子が、転んだ。

しばらくうつ伏せでうずくまっていたが、少し上体を起こし、自分の膝から血が流れているのを発見。涙目になっていき、終いにはその場で「うわーんっ！」と泣き出した。

百メートル位先には、もう電車の頭が見えている。坂巻は「やれやれ」と言いながらその女の子の方へ駆けて行った。そして

「大丈夫かい？」

と言つて、その子を抱き起こす。そのまま担いでさっさと線路を離れた。

女の子の膝に絆創膏を張つてあげた後、

「踏み切りが鳴り始めたら、渡っちゃ駄目だよ？」

と諭し、その子を帰した。揺れるランドセルを眺めつつ、はあ、とため息をつく。

自分の帰り道をとぼとぼ歩きながら、坂巻は呟くように、

「未来が可変つて事は、つまり全て予知夢で見た通りにしないと、その現象は起こらなくなる可能性があるってわけだ。という事は、関係なさそうな事でも、夢で見たその通りにしなけりゃならない。欲しくもないお茶を買ったり、ね。未来視も楽じゃないよ、ホント」

（後書き）

今まで三人称視点の小説をほとんど書いた事が無かったので、その練習です。個人的に一人称寄りの三人称視点が好きなんです、短すぎて使い分ける程でもなかったと言うか……。

ジャンルは一応SFにしましたが、SF作家の方には怒られそうな内容で、まあ、単なる高校生の放課後の話ですね。そんな感じですよ、はい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6503c/>

ESP部のとある日常

2010年10月8日15時33分発行